■病院長挨拶

京都大学医学部附属病院 病院長　三嶋 理晃

京都大学医学部附属病院概要の発行にあたり、ご挨拶を申し上げます。

京大病院は1899年に開設され、本年で112年目を迎えます。病院開設当時は内科・外科・耳鼻科・産婦人科・小児科・皮膚科・眼科の７科でしたが、歴代の病院長をはじめとした各職員のご尽力で、現在では31科・1,121床・職員約3,000人を有する特定機能病院に成長しました。

2004年国立大学が法人化し、独力で経営責任を有することが明確化され、その後、各病院が経営努力を続け、様々な意味で病院は新しい体質に脱皮しつつあります。

法人化を契機に、京大病院は３つの基本理念を掲げました。(1)患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する、(2)新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する、(3)専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する、です。これらの理念の実現を引き続き目指して努力していきます。

診療面に関しては、京都大学には多くの優れた医療資源があります。総合大学として全国に先駆けて設置した「がんセンター」は、各診療科が共同して横断的に診療するのが特徴で、各臓器で内科・外科・放射線科が合同してユニット外来を行っており、積貞棟1階の外来化学療法部と２階の集学的がん診療病棟とが結束してがん治療にあたっています。

また、「がん」を宣告された当初から精神的・身体的なケアにあたる、がんサポートチーム（緩和ケアチーム）も、好評を得ています。

その他、「臓器移植チーム」は、肝移植など腹部臓器移植で多くの実績を上げてきました。この数年、肺移植が多くなり、優れた成績を残しています。また、心臓移植開始も間近に控えています。2010年の改正臓器移植法の施行に伴って脳死移植が急増しつつあり、移植コーディネーターの確保などの問題を検討中です。さらにiPS細胞研究所と連携し、将来に向けてのiPS細胞バンク作成を目指して「iPS細胞診療部」を発足させます。

教育面に関しては、学部教育と初期研修教育の整合性の確保、近々予想される初期研修医定数の激減への対応、若い医師の関係病院間の円滑なローテーションの確立など多くの課題がありますが、医学教育推進センターを中心として、医学部と一体となって対処しつつあります。

研究面に関しては、産官学連携のシステムをより強化することと、臨床研究の推進をよりしやすくするシステムの構築という２つの重要な課題があります。これに対して、探索医療センター・EBM研究センターの機構改革を進めつつあります。さらに、先端医療機器開発・臨床研究センターをその拠点として活用いたします。

経営面では、法人化以降厳しい経営状況が続いておりましたが、病院収入の増加等により経営が安定しつつあります。今後、この経営の安定化を持続し、患者や職員のアメニティの向上等を進めていくこととします。

京都大学医学部附属病院は
四季折々の美しさと歴史と文化に満ちあふれた街·京都で
真摯に医療の発展に取り組んでおります

今後も、病院を取り巻く環境は予断を許しませんが、京大病院には大きな強みがあります。それは、京大病院の各診療科が一流のスタッフ陣から構成され、優秀なメディカルスタッフ·事務職員がいることです。職員一同が力を合わせて京大病院のさらなる飛躍を目指します。皆様におかれましては、今後ともご支援·ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

三嶋　理晃
Mishima,Michiaki